機関誌　聖協団報
通巻 第 638号
AD2020年6月1日
発行所 基督聖協団
千葉市中央区椿森2-20-5
編集　横山聖司
発行　岡本伸之

KINGDOM キングダム

理念　私たち基督聖協団は各個教会が愛と宣教によって建て上げられるために仕え合います。

危機と変化

清瀬教会　菅谷勝浩

この原稿を書いているのは、首都圏に非常事態宣言が出て間もない時期です。新型コロナウイルス感染拡大の収束を心から願い、愛する兄姉が守られますようにお祈り致します。

「…今がその時です。父はそのような人たちを、ご自分を礼拝する者として求めておられるのです。」（ヨハネ4・23）

四月にはいり、関東教区のほとんどの教会が礼拝のため会堂に集まることをやめ、インターネット礼拝、家庭礼拝に移行しています。まさかこのような状況になるとは、だれも予想していなかったことでしょう。危機に対する捉え方は、地域や教会によって、温度差があります。しかし、このような場合、リーダーの危機管理能力、決断力が問われることも事実です。

日頃、当たり前だと思っていた常識、自分の経験や価値観が必ずしも通用しなくなってきています。私たち自身、神との関係、家族の在り方、人間関係、教会とは、信仰の姿勢などが問い直され、変化を余儀なくさせられています。当たり前のように毎週会堂に集い、神さまを礼拝してきたことが、突然できなくなりました。

イスラエルでは、正統派のユダヤ教徒の人たちに感染が拡大しているようです。伝統や律法を守り続けるあまり、社会や周りとの関係を軽視することによる弊害でしょうか。また、日本社会の欠けや問題点が見えてきます。後手にまわる対応、迅速でない決断など。

しかし、窮する中でこその新しい発見もあります。私たちの教会も、コロナ対策を共に考え、知恵を出し合い、祈り合う中で、それぞれの賜物がより明確にされている恵みを感謝しています。

「…神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません。」（同4・24）イエスさまは、サマリアの女に礼拝をする場所が問題なのではなく、信じる者が、どこででも神を礼拝できる時が来ようとしていることを語られました。教会も私たち一人ひとりも、危機の時にこそ、変われるチャンスです。今がその時です。

私の教会ここがすばらしい

東京マンナ教会

多様性と一致

斎藤　俊哉

私は韓国に在住していた時に洗礼を受けました。韓国には丸三年いましたが、そこでの時間は私にとって、とても大切な時間になりました。日本人が一人もいない環境にいましたので、マイノリティとはこういうことなんだと体感できました。幸いにも職場の上司が教会に導いてくださり、本当に楽しい教会生活を過ごすことができました。日本も韓国も基本的には単民族国家ですから、外国人のような、ある意味異質な存在に対して、興味津々であるか、またはその反対であることもあります。（一般論です）

東京マンナ教会はというと、実に多様性に富んだ二面があります。キム先生が韓国からいらした宣教師ということもあるのですが、色々な国からのお客様もいらっしゃいますし、信徒たちの国籍も様々です。

そもそも教会は多様性を受け入れるという性質をもっていると思いますが、それぞれ異なった国籍、文化、言語、育った背景などの信徒たちが、それぞれの違いを受け入れ、ひとつとなろうとすることを自然に実践しているのがマンナ教会である思います。違いや個性を強調し過ぎたり、人の弱さを責めたり、自己中心的な主張を繰り返したりする世界の中で、私たちは大切なものに目を向け、耳を傾け、お互いの弱さを認め赦し合い、罪を認め、キリストの愛の中にひとつとなるべきではないでしょうか。

「すべての人をひとつにしてください」ヨハネ福音書17章21節

イエス様の愛によって集められ、導かれ、イエス様の内にひとつなること、これほど素晴らしいことはないと、私は思います。

一人の魂を救う町の教会

キム　カンヒョン

私は牧師の道に導かれ、一九九八年に長老教団の牧師になり、二〇〇一年に日本伝道のために派遣されました。二〇〇三年、青梅教会で出会った濱野好邦先生から指導を受け、東京基督教大学に入学した二〇〇五年には基督聖協団の正教師になり、卒教後、教会開拓の使命を受け、教団の支援を頂いて、東京マンナ教会を開拓することが出来ました。私が基督聖協団の牧師として、また、韓国教会の宣教師として教会を開拓するにあたり、大事に考えた事が三つあります。

第一は、基督聖協団で働く教会、第二は、日本人を中心にして誰でも礼拝をする国際的な教会、第三は、一人の魂を救うために用いられる教会、でした。

そして、今の東京マンナ教会は、実にそのような集いになっています。

東京マンナ教会は、二〇〇七年、基督聖協団関東教区に属し、日本人、韓国人、中国人（漢族と朝鮮族）、フィリピン人まで集う教会となり、十時四十分からの日本語礼拝と、十二時からの韓国語礼拝を捧げています。クリスチャン情報ブックによると、日本には約八千箇所のプロテスタントの教会があり、毎年約八千人が洗礼を受けるという事ですが、二〇〇七年に開拓した東京マンナ教会では、これまで十三年間で二十三名の日本人、韓国人、中国人の方々が洗礼を受け、日本の教会の平均洗礼者数を越えて、一人の魂に伝道する町の教会として用いられています。

基督聖協団に所属する教会の中では小さな教会ですが、父なる神様の命令に従い、伝道活動（特に子ども伝道）に力を入れており、様々なプログラムを実施しています。子どもクリスマス会は毎年参加者が増えていて、他の教会と共同で子ども伝道の働きを分かち合うこともあります。町の子ども達が大きくなって、自分の子どもの手を取って教会に来る日を祈ります。皆様の祈りのサポートをこれからもよろしくお願いいたします。

証 証

恵みの証

大学生活の恵み 二つの気づき

習志野教会 成瀬友佳里

こんにちは。高校生時代にhi-b.a.で出会った友人を通して習志野教会に導かれた成瀬友佳里と申します。今年三月に上智大学総合グローバル学部を卒業しました。

大学生活を通して受けた恵みはたくさんあり、一つひとつが豊かすぎて、ここではとてもまとめきれませんが、多くの出会いや経験、学びを通して得た二つの気づきについて綴ることにします。

一つ目の気づきは、「謙遜」の裏に、どこかで人に「良い人」と思われたい高慢さが自分にあったということです。自分のバックグラウンドや性格上、あまり感情的になったり、不平不満を言わないことが多く、人に同調したり共感することが多いので、人から「良い人」と言われることが多いです。その度に、「そんなことないよー」と言いながら、どこかで嬉しさを感じていた自分がいました。その嬉しさは、自分も自分のことを「良い人」、そんなあからさまに「悪いこと」をしたこともないから、と思っていたのかもしれないと今では思います。しかし、大学でサークル活動をしていく中で、それはただの勘違いであったことに気がつきました。大学ではキリスト者学生会（以下KGK）以外にも「めぐこ」という国際ボランティアのサークルに所属し、特に後者の団体に力を注いでいました。

その「めぐこ」で責任ある役割を任されていた時、共に働いていた友人に対して、怒りや嫌悪感を抱いたり、態度にも出してしまったことに、はっとさせられました。そんな自分もいることに驚き、葛藤し、砕かれ、無力に感じ、罪ある者なのだと理解したのは、もしかすると、これが初めてだったのではないかと思います。今まで高慢であったことも含め、この事実に気がつけたことは本当に感謝なことです。

そして、もう一つの気づきは、そんな「良い人」ではない、欠けだらけな自分をも神さまは用いてくださる、ということです。KGKでは、学内で「福音に生きること」と、伝道していく中で「福音が多くの人に広がること」を大切にしています。しかし、私個人は正直なところ学内でも、「めぐこ」の中でも、福音伝道を意識して活動していませんでした。むしろ、「めぐこ」の中では上記のように、自分の弱さや欠けだらけの姿をさらけ出してしまっていました。

それにも関わらず、特に私の汚い部分を知っている友人の一人が救われ、一人は教会に繋がり、引退の時にはある人からの手紙の中に、「今まで、愛は人に与えると減ると思っていたけれど、友佳里から、愛は与えることによって増えることを教えられた。」と書いてあり、神さまの御業と栄光を感じ、何度も胸が熱くなりました。

♪何もないところから　主は奇跡を起こされる　捧げます　この心　用いてください主よ～

この『5つのパンと2匹の魚』という賛美の歌詞にあるように、神さまは何もない自分を通してでも働かれるのだという恵みを知り、私の心は喜びでいっぱいです。

主は今もここにおられます。ここで働いておられます。ハレルヤ！

証 証

第63回大会報告

岡本伸之

今年の大会は、聖協団始まって以来という状況のもと、事務会のみという形で行われました。それは大会中止とも言えるもので、教役者会、聖会などは開催されず、常任代議員会も多くの先生方は委任状による参加でした。

言うまでもなく新型コロナウイルス感染対策ではありますが、中には「主は全能だから大丈夫」との考えもあったかもしれません。ただ、大切なのは主の御心であります。使徒の働きには、教会が「すべての民から好意を持たれた。」とあり、またローマ書には「上なる権威に従いなさい。」とあります。私たちは、ウイルスと戦う社会からも好意を持たれる必要がありますし、国民のための行政には協力する必要があるのです。また当然、先生方には高齢の方々もおられますから、その観点からも理事会で今回の措置が決定されました。その中で全能の主は栄光を表してくださるはずであります。またそれは各教会においても同じでありましょう。

当日の出席者は少ないながらも、常任代議員会は意義深いものとなりました。財政に関しては支出を抑えてきたことにより、赤字削減の見通しが分かち合われました。また教師福祉会の一時金支給についても、福祉会存続のためにこれを今後どうするかについて、有意義な意見交換が持たれました。またいくつかの善き提言もあり、今後に生かすことが期待されます。

その後の役員選出において、長年理事を務めてくださった濱野好邦師が候補を辞退することで、理事から退くこととなりました。濱野師は通算で四期八年もの理事長期間も含め、奮闘してくださいました。心から感謝いたします。幹事の粕谷紀子姉も退かれました。骨の折れるご奉仕を心から感謝いたします。また濱野好枝師が新理事として選ばれました。主のため、教団のため共に働けることを感謝いたします。

新理事挨拶

八王子教会　濱野好枝

新任理事の濱野好枝です。

キリスト聖協団は一九五八年（昭和三十三年）に設立され、十年後一九六八年に私は聖書学院に入学しました。一ヨハネ3・16が献身のみことばでした。それから五十年以上にわたり、この群れに奉仕させていただき、十重二十重に私を囲み指導してくださった先生方は、沢山の宝物を置いて天に召されて行かれました。

今年に入り、『向こう岸へ渡ろう』（マルコ4・35）との主の力強いことばをいただきました。主イエス・キリストのことばを堅く信頼しつつ、与えられました任を果たさせていただきたいと願っております。どうぞ祈りを持って励まし、ご指導くださいますよう宜しくお願い致します。

「〝祈る〟ことができるなら伝道者として奉仕できる。」との指導者のことばが、今も心に響きます。

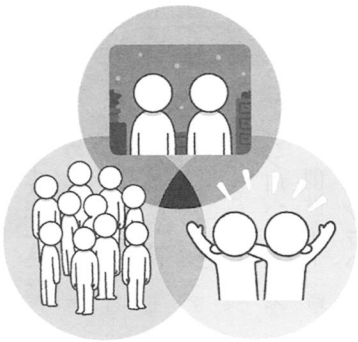
新型コロナウイルス 感染拡大に伴う教会の対応

清瀬教会 菅谷勝浩

首都圏に非常事態宣言が出て二週間が過ぎました。清瀬教会も三月初旬から高齢者、子どもたちには礼拝出席を控えていただき、今は無会衆礼拝で、インターネットや家庭礼拝となっています。教団本部・岡本理事長からも、現在までに三回にわたって各教会への感染予防対策の指針が送られています。私たち個人も教会も先の見えない不安と危機感をもって日々を過ごしています。しかし、神の視点から見た時に教会の変化は、さらに御心を求め成長していく良い機会となるのではないでしょうか。そのことを三つのポイントでまとめてみました。

一．礼拝の在り方

世界中の教会でインターネット礼拝が行われています。日本でもフェイスブックなどで分かち合われていますが、この場合、どのように発信するのか、技術的な話題が多いように思います。しかし、考えてみてください。今までのように礼拝堂において、同じ空間で説教者が会衆のレスポンスを肌で感じて礼拝が行われているのとは違うのです。そのような意味でも、ただ普段の礼拝を、オンラインにするだけでは足りない部分が出てきます。スマホなどの小さな画面を長時間観るのは疲れるし集中力もなくなります。つまり、会衆のことを意識して再考する必要性があり、礼拝スタイルを見直すことが大切です。聴衆が自宅で、居間や個室などで礼拝をしていることを意識して工夫してみましょう。礼拝時間を短縮し、内容もシンプルに、聞きやすい音質や画質、時には、事前録画した証しなどを入れたり、一方的に語るのではなく、考える時を設けたり、飽きさせない工夫も必要です。そのために、オンラインでなく家庭礼拝をされている兄姉のために、手引きとなる資料が必要です。清瀬教会では、メッセージのまとめと、賛美、祈りの課題を掲載したプリントを送るようにしています。オンラインの教会をより一方通行ではなく、相互方向のものにする方法を考え、メールや電話をして励まし合いましょう。牧師も、孤立感を覚える方が出ないよう、積極的に電話し合うこともよいのではないでしょうか。

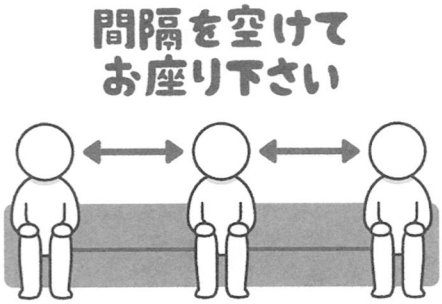


二．地域教会として

教会は、社会や地域の人たちにも責任があります。霊的なことを大切にするあまり、地域との関係が壊れては、伝道はできません。「人からしてもらいたいと望むとおりに、人にしなさい。」（ルカ6・31）とあるように、「世の光」として、信仰と行いのバランスをしっかりと保っていきましょう。

三．新しい ノーマル

友人の宣教師が最近言っている言葉ですが、今、私たちは様々な変化を強いられています。感染対策をしながら、仕事はテレワークへ、子どもたちはホームスクールへと。そういう意味で不本意ではありながら、私たちは「…苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。」（ロマ5・3〜4）とあるように、新しい経験をノーマル（正常、正規、標準的）なこととして受け入れていくことは、今の生き方の一つの知恵です。



一日も早いコロナウイルスの収束を願い、主の栄光を拝することを願っています。

（編集注：こちらの文章は、四月下旬に菅谷師に書いていただきました。発行される際には状況が好転していることを祈ります。）

献身の証

北中 芳樹

主を崇めます。私は、大学生の時、近所に住む宣教師の伝道、お導きにより洗礼を受け、クリスチャンになりました。その後、社会人生活を送りながら、滋賀県大津の教会へ通っていました。私は、先輩クリスチャンの神様への純粋な生き方、礼拝で語られる御言葉、祈り会などを通して心燃やされ、将来、神様の為に献身し、人生を捧げたいと思うようになりました。

十年後、神様は北海道の神学校へ行く道を開いて下さいました。そして、神学校生活の中で、講師をされている聖協団の石田牧師との出会いがございました。

月日は流れ、神学校三年目、私は卒業後の歩みについて祈っていました。その時は、お世話になった大津の教会へ戻ることを考えていました。しかし、二学期後半から、「北海道に残りなさい」という声が心の中に響くようになりました。きっとこれは、私の勝手な思い込みだろうと、更に二か月間、主を求めて祈りました。卒業間近の修養会で、学院の先生が私に、「あなたが行くところどこででも、あなたの神、主があなたと共におられるのだから。」（ヨシュア記1・9）の御言葉を示して下さいました。この箇所から、これからヨルダン川へ足を踏み入れるヨシュアの信仰、そして、創世記十二章の、約束の地へ主と共に歩みだすアブラハムの姿などを思いめぐらしました。

卒業後、私は主からの平安を受け取り、そして、学院長の励まし、母教会のご了承を得、聖協団札幌教会で訓練を受ける道へと歩み出しました。札幌教会での四年間は、私にとって、霊的祝福、心の整えられる大切な期間でした。石田牧師夫婦は、四重の福音、イスラエルの平和の為に祈る大切さ、御言葉に生きる姿勢、ひとつひとつを、愛と忍耐を持って教えてくださいました。そして、真っすぐ御言葉を説くことができます様にと、兄姉方のとりなしのお祈りが、私を支えて下さいました。

ある時、私は家の中で一人、聖書を読んで祈っていました。その時、「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、そしてわたしについて来なさい。」（ルカ9・23）の御言葉が心に迫ってきました。献身を志しているものの、心の中で自分自身が握りしめているものが、沢山あることに気付かされました。その様な弱さを抱える私に対して、「ついて来なさい」と、主からのお招きがありました。「神様、私のあなたへの献身は上辺だけのものでした。お赦しください。私の心も人生もあなたにお捧げし、キリストの道を歩ませてください。」と泣きながら神様に叫んでいました。今振り返る時、あの告白が、本当の意味で、神様への献身表明だったと思います。

今、旭川教会に遣わされ、年二回のスクーリング等で研磨の場が与えられていますことを感謝致します。聖協団の先生方、兄姉方の尊いお祈りを心よりありがとうございます。

本物の献身者となるために

旭川教会 北中 麻早

受洗して十四年、結婚して七年。クリスチャンとしての人生の半分を、敬愛する男性の妻として歩んで来ました。しかし、その七年間を振り返る時に覚える、小さな悲しみがあります。

結婚とほぼ同時に札幌教会へ転会し、聖協団の一員となりました。一年後に旭川教会へ遣わされ、さらに一年後には献身へと導かれることとなります。しかし、口下手でリーダーシップにも、召命感にも、乏しかった私は「牧師向きではない」と思っており、内心では尻込みし続けていました。

私たち夫婦には、まだ子どもが与えられずにいます。七年間の結婚生活の中で最も大きな悩みだった、と言っても過言ではありません。しかしその事実が、私が真に献身できずにいた最も大きな理由だったのかもしれない、と気づいたのは昨年のことです。

以前、一時期教会に来ていた方から、このような言葉を投げかけられたことがありました。「麻早さんは牧会ではなく、普通に子どもを産んで育てている方が合っているのでは?」心が抉られる思いがしました。「それが可能なら既にそうしています…」そう答えたい思いをグッと堪えました。

しかし、その問いかけがなければ「なぜ、あえてお与えにならないのか」ということを考えもしなかったでしょう。祈りつつその理由を探り求めていく中で、この御言葉が心に響きました。「ああ、自分を形造った方に抗議する者よ。陶器は土の器の一つにすぎないのに、粘土が自分を形造る者に言うだろうか。『何を作るのか』とか『あなたが作った物には手がついていない』と」（イザヤ書45・9）。神様は私たち一人ひとりに対して、御心のままに形造られるお方です。時には、当人が納得できないような形に造られるかも知れない。その造られた姿について器の方が文句をつけるのはとても愚かなことですが、それを私はしてしまっていたのだ…と気づかされたのです。

もし、何の妨げもなく与えられていたら、私は子育てを理由に献身から逃げたかもしれません。その弱さを神様は見抜いておられたので、真に召命に応え得る者となるために「あえて、今は」子を産み育てる喜びを取り上げられたのだ…と。与えられるにしても、そうならないにしても、「この召命を手放すことは絶対にしない!」と決意新たに歩み始めたのが、昨年春のことです。

旭川に遣わされて、幾つもの恵みにあずかっています。何といっても三浦文学の町。思えば三浦綾子さん・光世さんご夫妻も、病弱であったために子どもが望めなかったお二人でしたが、その中でキリスト教信仰に基づく多くの作品を生み出し、多くの人々を信仰に導いた方です。私もその一人であり、三浦文学の息づく町に遣わされたことに、神様の深いご配慮を思います。

「川がある。その豊かな流れは　神の都を喜ばせる。いと高き方のおられる　その聖なる所を」

（詩篇46篇）

報告

★3月20日、第63回常任代議員会、教団理事会が持たれました。今回は新型コロナウイルス感染防止のため、教役者会、信徒会総会、聖会、任命式は中止の措置が取られました。
役員選挙において、理事に岡本伸之師、菅谷勝浩師、平塚修久師、濱野好枝師、川島恂兄、中村勝吉兄、大川雄一郎兄が、幹事に大庭綾子姉、小川幸子姉が選出されました。

★3月22日、岡本理事長は飯田教会を訪問し、今後のことについて懇談の時を持ちました。

★4月7日、岡本理事長は日本福音連盟の常任理理事会に出席しました。新型コロナウイルス対策でオンラインによる会議でした。

★4月16日、教団理事会がオンラインにより開催されました。

★緊急事態宣言を受け、5月に開催予定であった「せーねんキャンプ」は中止されました。

★今夏に予定されていたキッズキャンプ(小学生)・餃子キャンプ(中高生)は、感染拡大防止と参加者の安全を考慮し、キャンプ場でのキャンプは中止となりました。通常のキャンプに代わるオンラインイベントなどを企画しております。

お知らせ

★教職者リトリート、日程の訂正。前号のキングダムで10月27日(火)～29日(木)とありましたが、正しくは10月28日(水)～30日(金)でした。申し訳ありません。訂正いたします。会場は変わらず聖心会マリア修道院黙想の家です。

理事長通信

新型コロナ対策にまだ日数がかかりそうです。どこの教会も「なんとか礼拝を守っている。」という現状かもしれません。集まることが重要である教会にとって試練ではありますが、教会は試練の中で成長してきました。迫害の中で証しの機会が与えられ、散らされて福音が広まりました。

ネット礼拝では、これまで教会に来ていない方が何人か「見ています」と連絡をくださいました。配信の苦労の中で互いへの感謝や主への従順を表すことができました。またSNSによって分かち合いの力を再認識した方も多いのではないでしょうか。現状をチャンスにして、教会の本質を再認識させていただきたいものです。

理事長　岡本伸之

発行所　千葉市中央区椿森2丁目20番5号　基督聖協団本部
編集者　横山聖司
発行人　岡本伸之
電話　千葉(043)253　8255番
振替　00120-3-14143（基督聖協団本部）
定価　一部50円

この新聞は、ものみの塔、統一協会、モルモン教とは一切関係ありません。